

2018年度 Tutor's Module が、2019年2月16日と17日に大阪発達総合療育センターにて開催されました。テーマは重症児の OT, ST、そして、MBCP の適用についてでした。各セッションの報告を掲載します。

○2019年2月16日（1日目）February 16, 2019 (Day 1)

1) 重症児の OT 大阪発達総合療育センター 作業療法士 辻薫

OTセッションでは、IBITA2014で紹介されたボバース概念に基づく臨床推論モデルを使って、講師陣が受講生にわかりやすく解説できるように、事例を通して臨床推論の構成要素の枠組みを見直し、仮説検証作業が行いやすいように意見交換しました。事例は、32週1500gで出生、重度仮死となり気管切開、胃婁、夜間呼吸器を使用している就学前の男児です。ご家族から就学にむけ、手指の自発運動を引き出す遊びやコミュニケーション手段について相談がありました。

基礎講習会では、重症児は問題解決の事例として取り上げられ、PT, OT, STのチームで取り組みます。講習会の問題解決過程で行うように事例の基礎情報とビデオから観察し critical cues を導く討論を行いました。①子どもと家族主体の相談から、機能目標を手内での簡易スイッチ操作とし、課題分析を行いました。課題分析では、②手の感覚運動と姿勢コントロール、選択運動と運動のつながりについて検討しました。そして、実際の作業療法場面をビデオで提示し、ハンドリング、言語、環境の側面から行った促通手段について解説しました。ハンドリングによる最小介助座位で、臀部と足底の支持基底面から感覚運動を促通し、手の随意運動によるスイッチ操作が向上していくことが事例で確認されました。

2) 重症児の ST 大阪発達総合療育センター 言語聴覚士 濱田浩子

2018年度、森之宮病院で実施した脳性麻痺児療育関係職種講習会で講義をした「重症児の食事とコミュニケーション」を提示し、意見をいただきました。

講義内容は、前講義担当者から引き継いだものに、自分のケースの映像を加えて行ったものでした。プレゼンテーションの後、もっと CBC の内容を付け加えて伝えることができないかとの質問がありました。そこで、どのようなスライドを付け加えれば、より CBC を踏まえた ST 講義になるかということで、グループディスカッションを行いました。3グループで話し合いがなされ、それぞれのグループから、つけ加えるスライドを1枚ずつ提案してもらいました。

姿勢コントロールと下顎の動き、感覚入力に気づくための姿勢コントロール、頸部の解剖図を入れる、という3つのスライドを提示されました。

今回の講義内容は多職種向けであったため、実際の介助技術の伝達の必要がありましたが、技術のみではなく、その理論的根拠をより明確に示す必要があるということが確認できました。

○2019年2月17日（2日目）February 17, 2019（Day 2）

MBCP ワークショップ ボバース記念病院 作業療法士 木瀬憲司

二日目の研修の課題は「ボバース概念評価と治療のワークシート（以下、MBCP）」でした。MBCPの構成要素（感覚運動の発達の要素、姿勢コントロール、選択運動と運動シーケンス）からの課題設定と評価から導き出された **Critical Cues**（治療の手がかり）を理解し、各人でシートに落とし込み、課題を明確にしながらグループ討議を行いました。その中で各人の臨床思考過程を整理すると同時に8週間講習会で受講生が作成したシート内容と対比し、双方の臨床思考過程を確認し合いました。確認後、作成されたMBCPのシートを最良の記載に導くにはどの項目を整理し、どの様にまとめれば良いかという視点でのグループ討議を行い「指導の方向性の可視化」を中心に議論を交えました。3時間の研修はあっという間に終了し、それぞれの学びと課題を受け取り帰路につきました。皆で討議することでMBCPの理解が深まり臨床実践の方向性が確認できた研修会となりました。